

## 国語

## ➔ 中学年 | 「読みの学習」

# 「文章の流れ (文脈)」を読みとろう ～書かれていない「つなぎ言葉」を意識させる～

## 1. 文と文とを「つなぐ」言葉に着目する

「つなぎ言葉 (接続語)」に着目した学習は、時系列で物事を理解・説明できるようになる2年生あたりから始められます。例えば、「まず」「つぎに」「そして」「最後に」といったつなぎ言葉に着目させて、説明文の文章構成を読みとったり、これらの言葉を使って作文指導を行ったりするなど、2年生は、順序学年ともいわれているからです。

3年生になると、「しかし」「それに」「なぜなら」といった、逆接や追加、理由などを表すつなぎ言葉にも着目させ、より複雑な文章構成を考える意識を育てていきます。この時、ぜひ一緒に指導しておきたいのが、「書かれていない《つなぎ言葉》を意識させる」ということです。

## 2. 文と文の関係を意識した読み方を指導する

段落ごとの内容をとらえながら読むことが目標とされている3年生の説明文「自然のかくし絵」(矢島稔著・東京書籍3年上)を見てみましょう。

このほかにも、ほご色によって上手に身をかくしているこん虫はたくさんいます。【 】ほご色は、自然のかくし絵だということができると良いでしょう。

【 】を空欄にして提示することで、文と文とのつながりを意識させることができます。ここ以外にも、「それに」「ですから」など、つながりを意識させることができる言葉は本文中に多く出ています。

次に、【 】に注目してください。実は、本文の【 】には、つなぎ言葉は入っていません。【 】以下の文は、はじめからここまでのまとめとなる文

ですから、「つまり」「ですから」などの言葉が入っていてもよいはずですが。他にも、具体例を示している文の前であれば、「例えば」などの言葉が入っていてもよいはずですが。

つまり、このような教科書には書かれていない「つなぎ言葉」を考えさせることで、文と文との関係を意識した読み方を指導することができるのです。

## 3. 作品の構造的な「しかけ」に気づく

物語の中でも、「つなぎ言葉」が重要な役割を果たしている作品がいくつもあります。例えば、東京書籍4年下に出てくる「せかいいちつくしいぼくの村」という話は、戦争が続くアフガニスタンの村を題材とした物語ですが、この短い作品の中には、「でも」という逆接のつなぎ言葉が5回も登場します。そして、この「でも」の前後の文を比較することで、主人公の少年の揺れ動く心の有様を理解できます。

実は、この物語は次のような衝撃的な終わり方をしています。しかし、この最終場面の前に、書かれていないつなぎ言葉「でも」を入れることで、前場面の少年の思いと対比されて、作者が伝えたかった主題に迫る読みや、作品の構造的なしかけに気がつく子どもが現れてくるはずですが。



「せかいいちつくしいぼくの村」  
(小林豊/作・絵、ポプラ社)